



進行相の語彙的ソースの諸類型及び日本語タイプ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 麟声 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017671

進行相の語彙的ソースの諸類型及び日本語タイプ

張 麟 声

1. はじめに

Bybee et al. (1994) は, *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world* という書名が示す通り, 諸カテゴリーの文法化に関するスケールの大きい著作であり, その第5章Progressive, Imperfective, Present, and Related Sensesでは, サンプル調査という手法によって, 世界の言語から選び出された対象言語76に対して, progressive (=進行相) の語彙的ソースを調べている。そして, そもそも進行相を持たない言語もあるので, ソースが確かめられた言語は47で, ソースの属性については, 次のように6種類にまとめている。

- (1) Location (18言語)
- (2) be+Nonfinite form (6言語)
- (3) Movement (5言語)
- (4) Reduplication (4言語)
- (5) Other (5言語)
- (6) Unknown (9言語)

(pp.128-129)

6種類のなかで, (6)のUnknownは語彙的ソースを確定できないことを意味し, (5)のOtherは(1)から(4)までの類型に含まれないケースを指す。そして, (4)のReduplicationは形態論のプロセスで, それに対して, (1)から(3)までの29言語のソースは, 形式の意味という角度からの分類だと考えられる。

実際, Bybee et al. (1994) では, この29言語のうちの, (1)Location (18言語) と(2)be+Nonfinite form (6言語) をlocative sourcesと見なしたうえで, movement sourceの(3)Movement (5言語) と共通して, locative elementを含むとし, 次のように述べられている。

The similarity between the movement sources and the locative sources is that they both contain a locative element: they both say something (albeit quite vague), about the location of the subject and the activity, either that the subject is located somewhere doing something or the subject is moving (around) doing something.

(p.133)

Movementをlocative elementに含めること自体には賛成する。なぜならMovementは移動する場所があってはじめて実現できる動きであり, 場所性を有しているからである。しかし, なぜ言語によっては, Location&be+Nonfinite form, またはMovementが文法化するかといった, 一段と深いレベルでの課題の解明が求められる。

本稿では, まずこのBybee et al. (1994) に残されている課題を突破口とし, locative elementを表わす「所在述語」という角度から, Stassen,L. (1997), Stassen,L. (2013) のアイデアを発展させて, 言語をいくつかの形式的タイプに分ける作業をし, そのタイプの性格の異同によって, 上述の現象を説明することができると主張する。その上で, 日本語が所属するタイプを日本語タイプと呼び, その中核的なメンバーを確認し, 今後, アスペクトをはじめとする諸カテゴリーでの類型論研究を行うための基礎的概念として確定する。

以下, 第2節では, 先行研究を概観し, 言語には進行相を持つものと持たないものがあることを述べる。第3節では, locative elementを表わす言語の「所在述語」という角度から, Stassen,L. (1997) 及び同 (2013) を発展させて, 言語を5つの形式的なタイプに分け, この分類でBybee et al. (1994) に残されている課題を解くことがで

きると主張する。そして、第4節では、5タイプの1つの代表的な言語であるロシア語に進行相が発達しない理由を追求し、第5節では、日本語タイプという概念を提案し、第6節をまとめとする。

2. 進行相を持つ言語と持たない言語

個別言語の記述文法書を捲ってみれば、進行相を持つ言語も持たない言語もあるという現実容易に気づく。しかし、どんな言語が進行相を持ち、どんな言語が進行相を持たないかということ正面から論じた研究はたいへん稀で、現時点での一番まとまった議論は、亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1995)の見出し項目である「進行相」だと思われる。その「進行相」は「進行相と継続相」及び「各言語の進行相」という2つの部分からなっており、後者の「各言語の進行相」において、英語の進行相について述べた後、次のように、進行相を持つてはいるものの、使用が義務的ではない言語のグループと、そもそも進行相を持っていないグループについて、述べられている。

英語の進行形、すなわちbe+ingに類する構成によって進行相を表わす言語には、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、(フランス語)などがある。しかし、これらの言語における進行形は英語と異なり義務的ではない。つまり、単純現在形でも進行相を表わすことができる。

(略)

同じく、ドイツ語、ロシア語、ウラル諸語なども、進行形といわれるような一般的かつ義務的な形式をもたず、普通は単純現在形(未完了形imperfect)で進行相を表わす。この場合、現在を表わす副詞などが進行相の意味を具体化する。

(p.753)

進行相を持つてはいるが、使用が義務的ではないスペイン語、ポルトガル語、イタリア語、フランス語と、そもそも持ってないドイツ語、ロシア語、ウラル諸語(例えばフィンランド語やハンガリー語)とは、

おそらく異質な原理が競合されてできた別々の「結果」であろうと考えられ、本稿では、とりあえず前者に関しては不問にし、後者に限定して、その進行相を持たない理由を突き止める。

3. locative elementから見た言語のタイプ

locative elementを表わすのに際し、言語によって異なるストラテジーが用いられるということは、身近な言語を通して容易に理解できる。例えば、「あの本は机の上にある」という事態を表わすのに、日本語、英語、中国語では、それぞれ次の例(1)、例(2)と例(3)が使われる。

- (1) あの本は 机の上に ある。
- (2) The book is on the desk.
- (3) 那本书 在 桌子上。

3文の意味は同じだが、道具立てがそれぞれ異なる。英語ではコンピュータが、日本語では所在動詞とも存在動詞とも取れる「ある」が、そして、中国語では存在動詞の「有」と完全に異なる所在動詞の「在」が用いられるからである。

英語のコンピュータは、例(2)のような所在表現だけではなく、名詞述語文にも形容詞述語文にも使われるが、日本語や中国語のコンピュータは、名詞述語文の述語としてしか用いられない。名詞述語文、形容詞述語文及び所在文の述語が同じ形かどうかという課題について、Stassen,L. (1997) では、The Split-Share Tendencyとして研究が進められ、そして、Stassen,L. (2013) になると、次のように、言語の2類型を立てるに至っている。

In the terminology of Stassen (1997), a language is called a **share-language** if the encoding strategy for locational predications is (or can be) used for nominal predications, and **split-language** if

the encoding strategies for the two constructions must be different. An obvious example of a share-language is English. As the above example sentences demonstrate, this language can use the lexical item be both as a nominal copula and as a locational support verb. In contrast to this, Mandarin is a split-language, as the copula and the locational verb are not the same.

(1) Mandarin (Li and Thompson 1977: 422; Li and Thompson 1981: 365)

a. *nei-ge rén shì xuésheng*
that-CLF person COP student

‘That man is a student.’

b. *Lìsì zài hǎi-biān*
Lisi be.at ocean-side

‘Lisi is by the ocean.’

(WALS Online - Chapter Nominal and Locational Predication)

至極論理的ではあるが、しかし、日本語をこの分類に加えると、中国語と同じsplit-languageとするしかなく、それでは十分ではない。その理由は以下の通りである。

もしコンピュータとlocational verbの関係を問うのならば、確かに中国語も日本語もsplit-languageである。一方、上述のように、中国語では、locational verbである「*zài* = (在)」とは別に、existential verbとしての「有」が存在するのに対して、日本語では、locational verbとexistential verbのどちらも「いる／ある」という同一の形しかない。本稿の最終的な目的は類型論研究で広く使われる日本語タイプの確立にあるため、専用のexistential verbを持つ中国語と持たない日本語とを同じタイプに振り分けては、本質的な議論ができないからである。

そのために、本稿では、日本語のように、コンピュータとlocational verb&existential verbが異なるレベルであるsplit-languageをsingle

split-language（一重分裂言語）と呼び、これに対して、コンピュータも locational verbも、それから、existential verbもそれぞれ違う形を有する中国語のような言語をdouble split-language（二重分裂言語）と呼ぶ。

このように、split-languageに関しては、Stassen,L. (2013) がない論理を筆者が工夫して、その二分を図らなければならないが、share-languageになると、Stassen,L. (2013) ですでに以下のような有益な分け方が提示されている。そこでは、まずよく見られる代表的な英語をあげ、そして、それに続く形で、まれにしか見られない2つの別のケースが述べられている。

the “lexical” form, which involves the use of the same lexical item for nominal copula and locational support verb, is by far the most frequent.

(略)

The other two possible forms of shared encoding are rather uncommon. This is due to the fact that, for locational predication, the use of a full locational support item is the overwhelmingly preferred option (see Stassen 1997: 55-61). Thus, we only rarely find that a language has share-status on the basis of a zero-zero encoding.

(略)

Finally, share-status for a language is also possible on the basis of a verbal encoding for both nominal and locational predicates. Since verbal encoding is definitely a minor typological option for both of these predicate types, it follows that a verbal-verbal shared encoding will be very uncommon as well.

(WALS Online - Chapter Nominal and Locational Predication)

the basis of a zero-zero encodingとthe basis of a verbal encoding for both nominal and locational predicatesという2ケースのうち、後

者は、以下のKorku語の例で示されているように、シェアしているのは、述語ではなく、述語の語尾である。

- a. *ing shene-ba*
 ISG go-NONPST
 'I go/will go.'
- b. *di dhega kad ojha-ba*
 that stone heavy load-NONPST
 'That stone is a heavy load.'
- c. *di ura-gen-ba*
 it house-at-NONPST
 'It is at home.'

(WALS Online - Chapter Nominal and Locational Predication)

つまり、NONPSTとされている*ba*は、非過去の意味の語尾であり、日本語の「る」形にあたる。語尾を問題にするのならば、以下のように、日本語もそのように揃えることは可能だが、進行相の語彙的ソースを追究しようとする本稿においては、動詞全体ではなく、動詞の語尾だけの考察は無意味だからである。

- (4) わたしはこれから食べ^る。
- (5) わたしは教師であ^る。
- (6) わたしは研究室にい^る。

したがって、以下、本稿では前者のzero-zero encodingだけをとりあげる。亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1995:753)でその進行相を言及しているトルコ語の名詞述語文の述語と所在述語文の述語は、以下の例(7)と例(8)のように、まさにこのタイプである。例(7)ではAli(アリ)とçocuk(子供)という二つの名詞だけが並び、例(8)でもAli(アリ)とevde(「家」の与格)という、二つの

名詞だけが並んでいるからである。

(7) Ali çocuk. アリは子供だ。

(8) Ali evde. アリは家にいる。

(林徹 2013 : 61)

このようなパターンを, Stassen, L. (2013) では, 名詞述語文でも所在述語文でも明示的にコンピュータが使われる英語などに対して, zero-zero encodingと呼んでいるが, 本稿では, 対照的な用語を工夫し, 英語のようなケースをovert share-language (明示的シェア言語) と呼び, トルコ語のようなケースをcovert share-language (非明示的シェア言語) と呼ぶことにする。

だが, 本稿ではこのように得たcovert share-language (非明示的シェア言語) に対して, そのさらなる下位分類を考えなければならない。なぜならトルコ語もロシア語もこのケースに当たるものの, 前者では「歩く」という動詞が進行相の語彙的ソースとなっているのに対し, 後者ではそもそも進行相を持たないため, 両者は性格が大きく異なるからである。

このように, 進行相のありかたから分類を考えていくのだから, 今までの分類とは角度が大きく異なる。つまり, ここで言う, covert share-language (非明示的シェア言語) におけるトルコ型言語とロシア型言語の下位区分は, 名詞述語文の述語と所在叙述文の述語に現れるコンピュータや所在述語などとの異同というソース側の事情からではなく, トルコ語のような言語には進行相があり, ロシア語のような言語には進行相がないというゴール側の事実から検討を行うということを意味する。

このようなとらえ方の相違をあえて断ったうえで, 本稿では, トルコ語のような言語を, transitive & intransitive prominent covert intransitive type share-language (他動&自動卓越非明示的シェア言語) と, ロシア語のような言語を, perfective & imperfective prominent

covert share-language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語)と呼んで、2つのタイプに分けることにする。

まず transitive & intransitive prominent (他動&自動卓越) という修飾語句の意味についてだが、これは以下の日本語のように、意味が相関する他動詞と自動詞がペアとなって、動詞の語彙体系に存在していることを意味する。

上がる・上げる, 揚がる・揚げる, 開く・開ける, 空く・空ける, 温まる・温める, 当たる・当てる, 改まる・改める, 浮く・浮かべる, 薄まる・薄める, 植わる・植える

一方, perfective & imperfective prominent covert share-language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語)とは、ロシア語の「書き上げる (написать)」と「書く (писать)」のように, perfective (限界達成の意味を持つ) 動詞と imperfective (限界達成の意味を持たない) 動詞がペアとなって動詞の語彙的体系に存在する言語の現象を指す。

以上の考察をまとめると、本稿では、言語を次のように5タイプに分けたことになる。

- ① single split-language (一重分裂言語) : 日本語など。
- ② double split-language (二重分裂言語) : 中国語など。
- ③ overt share-language (明示的シェア言語) : 英語など。
- ④ transitive & intransitive prominent covert intransitive type share-language (transitive & intransitive 他動&自動卓越非明示的シェア言語) : トルコ語など。
- ⑤ perfective & imperfective prominent covert share-Language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語) : ロシア語など。

そして、そのそれぞれのタイプについて、名詞述語文, 所在述語文, 存在述語文, 進行相を用いた表現, 及びこのレベルで定められる進行

- ・ 進行相を用いた表現：О kitap oku-vor.
彼 本 読む-進行
 - ・ 進行相の語彙的ソース：移動動詞起源 (movement verbのvor)。
- ⑤ perfective & imperfective prominent covert share-language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語)：ロシア語など。
- ・ 名詞述語文：Он ученик.
彼 学生
 - ・ 所在述語文：Он в классе.
彼 与格 教室
 - ・ 存在述語文：В классе есть ученик.
与格 教室 いる 学生
 - ・ 進行相を用いた表現：Он читает книгу.
彼 読む 本
 - ・ 進行相の語彙的ソース：なし。

ここまで論を進めてくると、Bybee et al. (1994)に残されている課題はおのずと解決されたことになる。つまり、所在述語動詞が存在述語動詞と同形の①single split-language (一重分裂言語)であろうと、所在述語動詞が存在述語動詞と同形ではない②double split-language (二重分裂言語)であろうと、所在述語動詞も存在述語動詞も名詞述語文の述語動詞もコピーラ一本で賄っている③overt share-language (明示的シェア言語)であろうと、そのような述語動詞が明示的に用いられさえすれば、文法化して、locative sourcesとしての進行相を作り上げている。一方、所在述語動詞が明示的に用いられない④transitive & intransitive prominent covert intransitive type share-language (transitive & intransitive 他動&自動卓越非明示的シェア言語)では、前3タイプにおいて、文法化するソースが、所在述語表現に存在していないので、仕方なく、移動述語文における移動動詞が文法化のソースとして選ばれ、それがmovement sourcesとして現れるのである。

Bybee et al. (1994) における(3)Movement (5言語) はまさにこのタイプなのである。

4. ロシア語に進行相が発達しない理由について

この節では、ロシア語のようなperfective & imperfective prominent covert share-Language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語) に、なぜ進行相が発生しないかについて、考察する。

いかなる言語形式の発達も使用者側の、言語表現に対する厳密且つ的確な需要が原動力になっていると考えられるが、その種の需要は、言語がマスメディアや文学作品などに用いられる文字言語になっているのかどうかと無関係ではないことは言うまでもない。英語、中国語、日本語に比べて、ロシア語に対する需要が使用者側に低いと言うことができないとすれば、ロシア語に進行相が発達していない理由については、使用者側にではなく、言語自体の仕組みに求めるほかない。そして、言語の仕組みとしての理由は次の通りである。

上述の通り、perfective & imperfective prominent covert share-language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語) では、動詞のペアとして、perfective (限界達成) 動詞とimperfective (限界非達成) 動詞とが動詞の語彙的システムに存在する。ロシア語の一組の動詞を例にすれば、perfective動詞はたとえば「書き上げる」にあたるнаписатьで、imperfective動詞は例えば「書く」にあたるписатьである。両者の違いは、前者に接頭辞としてのнаがついているということになっており、重要なのはこの種のペアが語彙的に体系的に存在するだけではなく、テンスのシステムも違うことである。具体的に言えば、perfective (限界達成) 動詞のテンスは未来形と過去形の2項からなっているのに対して、imperfective (限界非達成) のテンスは未来、現在、過去の3項体制なのである。

まず、身近な日本語から考えてみよう。日本語では、transitiveかintransitiveかに関係なく、すべての動詞が一様に過去対非過去という2項対立のテンス体制を持つ。そのために、例えば、動作動詞であ

る「読む」の過去形の「読んだ」は過去に行われた動作を表わし、非過去形の「読む」は未来に行われる動作を表わす。つまり、過去対非過去という二項対立のシステムの言語においては、動作動詞の基本形は、現在行われている動作を表わす手段としての役割を果たせないので、それを言い表す進行相を生み出すモチベーションが存在するのである。

一方、上述のとおり、ロシア語のimperfective動詞のテンスは3項体制であり、引き続き日本語の「読む」を例にすると、過去形の「読む」、現在形の「読む」と未来形の「読む」という3つがそろっていることになる。そうすると、未来形の「読む」は未来に行われる動作を表わすのに対して、現在形の「読む」は現在行われている動作を表わすことになる。このように、現在行われている動作を表わす形が既に存在している以上、改めてそれを表わす形を作るモチベーションがないのは当然であろう。ロシア語のような言語に進行相が発生しない理由は、このようにその動詞のテンスのシステムの性格に求めることができると考えられる。

5. 日本語タイプについて

本節では、日本語が入るsingle split-language（一重分裂言語）を日本語タイプと呼び、その特徴及び中核となるメンバーについて考えてみる。

特徴の1つ目は、言うまでもなく、コピュラ≠所在述語動詞&存在述語動詞ということである。これに関連して言えるアспектという分野における大きな特徴は、以下の例（9）、例（10）、例（11）のように、進行相も結果相も、それから、パーフェクトも同じ形をしていることである。

（9）彼は歌を歌っている。

（10）彼は道端に倒れている。

（11）わたしがあのあたりを通った時に、彼はすでに道端に倒れていた。

もちろん、特徴的な性格はアスペクトという分野に限ったことではない。所在動詞&存在動詞と違うコピュラを持っているために、それが束縛されることなく文法化することができ、「のだ」という重要な文法形式が作られ、焦点を取り立てるのにも、複数のモダリティ的な意味を補うのにも活用されている。他にも何種類か仮説としてその特徴を考えているが、本稿での言及はこの程度にする。

日本語タイプの中核的なメンバーに、暫定的に韓国語とモンゴル語族言語が入ると考える。この主張は、かつてアルタイ語族と呼ばれていたツングース諸語とチュルク諸語を排除することを意味する。トルコ語を含むチュルク語を排除する理由はすでに間接的に述べてきており、ツングース諸語を入れないのは、以下に述べるように、満州語とシベ語に関する研究に基づいて、暫時的に判断した結果である。

具体的に言えば、満州語に関しては、津曲敏郎（2002）によれば、進行相はまだ生まれていない。また、シベ語については、児倉徳和（2018）、同（2021）に進行相は生まれているが、しかし、それは「モンゴル諸語の存在動詞の一つ a- の語幹が借用された、-me + a-Xe-（同時副動詞 + a- の完了形）という構造に分析でき、借用元は接触の状況から考えてダグール語と推測している」（私信によるご教示）とされているからである。つまり、その進行相は言語接触の結果であり、ひとまず別扱いする必要があるからである。

そして、日本語タイプを立てる理由は、Bickel, Balthasar（2007）で提唱されている“the new goal of typology is the development of theories that explain why linguistic diversity is the way it is.”を実行に移すためである。つまり、日本語という1言語からではなく、また、一度に全世界の言語をサンプル調査によって取り扱うのでもなく、その文法事実について深い理解を持つ身近な日本語が属する言語タイプから、世界の言語に向けて、類型的な思索を行っていくことが目的なのである。そして、この種のsingle split-languageは、決して東アジアにだけではなくて、世界の他の地域にも存在している可能性があ

ると考え、それを徐々に確認して確定し、世界の言語における多様性の非連続分布の理由の解明に努める。

6. おわりに

本稿では、Bybee et al. (1994)に残された、なぜ言語によっては、Location&be+Nonfinite form、またはMovementが文法化して進行相の語彙的ソースになるかという課題を解くために、身近な言語を以下のように5タイプに分けて分析を行った。その結果、「所在述語文において、動詞が明示的に用いられる言語であれば、その動詞が文法化して進行相を作り上げ、明示的に用いられない言語で、進行相を作り上げる需要が出てくると、所在述語文に用いられる動詞の代わりに、移動述語文に用いられる動詞が文法化していく」という結論を出し、Bybee et al. (1994)の残した課題を解決した。

- ① single split-language (一重分裂言語)：日本語など。
- ② double split-language (二重分裂言語)：中国語など。
- ③ overt share-language (明示的シェア言語)：英語など。
- ④ transitive & intransitive prominent covert intransitive type share-Language (他動&自動卓越非明示的シェア言語)：トルコ語など。
- ⑥ perfective & imperfective prominent covert share-language (完結&非完結卓越非明示的シェア言語)：ロシア語など。

また、今後の類型論研究の基礎的概念として、「日本語タイプ」を提案した。

本稿の作成にあたり、トルコ語については岡山大学の栗林裕教授、また、ロシア語については、中国の上海外国語大学の陳潔教授に教えていただいた。謹んで御礼を申し上げたい。ただし、両言語の用例の使用に関してミスが起きていれば、その責任はすべて筆者にある。

参考文献：

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著 (1995) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 東京:三省堂
- 児倉徳和 (2018) 『シベ語のモダリティの研究』, 東京:勉誠出版
- 児倉徳和 (2021) 「シベ語の文法形式の形態論的ステータス —語から接辞へ?—」, 津曲敏郎先生古稀記念集編集委員会 『津曲敏郎先生古稀記念集』, 網走:北海道立北方民族博物館
- 津曲敏郎 (2002) 『満州語入門20講』, 東京:大学書林
- 林徹 (2013) 『トルコ語文法ハンドブック』, 東京:白水社
- ポール・ギャルド著, 柳沢民雄訳 (2017) 『ロシア語文法 音韻論と形態論』, 東京:ひつじ書房
- Bickel, Balthasar (2007). Typology in the 21st century: major current developments. *Linguistic Typology*, 11: 239-251.
- Bybee, J., Perkins, R., and Pagliuca, W. (1994). *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kim, Minju. (2009) The intersection of perfective and imperfective domains A corpus-based study of the grammaticalization of Korean aspectual markers. *Studies in languages* 33: 1 (2009), 175-214.
- Stassen, L. (1997). *Intransitive Predication*. Oxford: Clarendon Press.
- Stassen, L. (2013). Chapter 119 Nominal and Locational Predication. Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) 2013. *The World Atlas of Language Structures* Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://wals.info/chapter/119>.
- Bickel, Balthasar and Nichols, Johanna. 2007. Inflectional Morphology. In Shopen, Timothy (ed.), *Language Typology and Syntactic Description 3 Grammatical Categories and the Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press. (2nd edition).
- Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin (eds.) 2013. *The World Atlas of Language Structures* Online. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://wals.info/>.

(大阪府立大学教授)